説教要旨『罪人のリーダーシップ』

ルカによる福音書 18 章 9～14 節

イエスのたとえ話の中で、ファリサイ派は、自分が「ほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、…徴税人のような者でもないこと」（11 節）を自負しています。「徴税人のような者」とは、ここでは、時の権力（ローマ政府）に迎合し、必要以上に税金を取り立てて、私腹を肥やしていた人たちのことを指しています。また、ファリサイ派は「週に二度断食し、全収入の十分の一を献げて」（12 節）いました。これは、当時のユダヤ社会の義務規定をはるかに超えた行いです。以上のことから分かるのは、彼が誰よりも「清く・正しく・美しく」あろうとした熱心なユダヤ教徒であり、周囲からも「あの人は別格だ」と思われるような存在であったということです。たとえ彼が「自分は正しい人間だとうぬぼれて」（9 節）いたのだとしても、それだけの実績がある訳ですから、誰も責められないでしょう。ところが、たとえ話によると、神の前で義（正しい）とされたのは、ファリサイ派ではなく、徴税人の方でした。この徴税人は、あまりの自分の罪深さに、目を天に上げることもできず、「神様、罪人のわたしを憐れんでください」（13 節）と語っています。しかし、たとえ反省したからと言って、神の前に義とされたのが、ファリサイ派ではなく、徴税人であったというのは解せません。

よく見ると、徴税人は「罪人のわたし」という言い方をしています。これは、他の人はいざ知らず、他ならぬ罪人なるこの私という感覚が込められた告白です。神との一対一の関係の中で、「私の罪」を告白してるのです。一方ファリサイ派は、他人の罪を数え上げ、自分の功績と比較することで、自分がどれだけ正しい人間であるのかを確かめています。ファリサイ派の感覚は、毎日のように見聞きしている異常なニュースに慣れてきて、自分の異常さが薄れてしまう状態と似ています。異常な事件と比べると、まるで自分が健全で立派で、はるかにマシな者のように思えてくる感覚です。しかし、それは比較する基準がまるで違うのだと、聖書は語っています。

イエスが求めているのは、誰かとの比較のなかで「私」を語ることではなく、神との関係のなかで「私」を語ることです。神との関係のなかで見えてくるのは、絶えず不完全な「罪人の私」であり、それでもなお神に「愛されている私」の姿です。正しさからは程遠く、ただ神の憐れみをその身に受けることしかできなかった徴税人の姿こそ、神との関係の中で生きている私達の本来の姿であることを主イエスは示されているように思います。

（文責：望月達朗牧師）